

「治す医療から支える医療へ」

医療の進歩は、私たちに命を救うという希望を与える。しかし、それは本当の意味での救いになるのだろうか。私は、かつての自分の経験を通し学んだ事がある。

一つ目の経験は、祖父が晩年、認知症と長い闘いを続けたことだ。親族の集まり会の中心であり、いつも周りに気を遣い優しい笑顔を絶やさなかった祖父が、少しずつ知らない人のように変わっていく姿をみるのはとても辛かった。最終的に、祖父は一人で食事がとれなくなり、私たちは祖母と一緒に力を合わせて介護の日々を送ったが、どれほど尽くしても病気の進行を止めることはできなかった。そして去年の夏、祖父は静かに亡くなった。この経験を通して、私は医療の力だけでは限界があること、そしてその限界を補う周囲の支えがどれほど重要かを痛感した。

二つ目の経験は、私の再従姉妹が、9年前の秋、1000グラムにも満たない超低出生体重児で生まれたことだ。当時7歳だった私は、彼女が、生きられるか分からないと聞いて、ショックを受けたのを覚えている。医師や看護師たちが懸命に命を守り、彼女は無事に退院できたものの、現実は厳しかった。発達の遅れや日常生活の壁が立ちはだかり、そのたびに家族はこれらの問題と向き合わざるを得なかった。彼女の両親は、ただ「助かった」という事実で安堵することなく、今なお特別支援教育を根気強く続けている。彼女は、未来を少しでも明るくするために、定期的に小児病院を受診しながら、病院の先生・スタッフの方・家族に支えられ、自分のペースで毎日を積み重ねている。

この二人の大切な家族をみて、私は強く感じる。命をとりとめ、助かることは本当に重要だが、それがすべてではない、ということ。医療の使命は命を救うだけで終わってはならず、救われた命がその後も自分らしく生きられる道を照らし出すことが必要だ。医療が未来にさらに発展すれば、多くの難病や未知の病気などまでが治療できるようになるだろう。しかし、特効薬が奏したり手術をしたりすることで、ただ命を助けても、障害が残ることや予期せぬ苦しみが続くことがあることを忘れてはいけない。助けられた人たちが自分の人生に誇りを持ち、どんな状態でも「生きていてよかった」と思える社会をつくるのが、医療の真のゴールであり、私が考える「Vision」だ。そこで、私の「Vision」を実現するために私が実行したらよいと思う「Action」の例を2つ挙げる。

一つ目は、日常生活の中で当たり前の配慮を意識する事だ。バスや電車の優先席を本当に必要としている人に譲ったり、困っている人がいれば声をかけたりするなど、自分の視野を広く持ち、自ら考え行動に移す事が大事である。私には、地元のアトリエで出会った、先天性の下肢不自由でいつも車椅子で生活している友人がいる。はじめは、どのように接して良いか分からなかったが、趣味の油絵を通してお互い仲良くなった。今では、彼女が移動するときは、私が彼女の車椅子を押したりして、少しでも彼女の手助けになろうと心がけている。未来を担う私達一人一人が、個人の個性を尊重し、「自分らしく生きる」手助けをするには何をしたらよいか、自分は何ができるかを、良く考えなければなら

ない。

二つ目は、情報化社会に生きる私たちだからこそできる、社会への情報発信を使って、困っている人をサポートすることである。SNSなどを活用し、障害を持ちながら生活している人や病気と闘っている人の現状、そして、彼らがどのようなサポートを必要としているか、などをリアルタイムで周囲に広めていけたら良いと思う。IT機器の利用により、動画などで、遠距離にいる人とも、励まし合えたり助け合えたりする。距離は遠く離れていても、心は近くに感じられるからこそ、直接的なサポートを実行に移しやすくなる。実際、私は、シカゴに住む一人暮らしの91歳の大伯母と、度々zoomで連絡を取り、体調を伺ったり近況報告をしたりしている。大伯母と話すことで、自分が知らなかった昔の話を聞いたりすることもでき、とても楽しい時間を過ごしている。何より大伯母が喜んでくれることが、とても嬉しい。

誰もがいずれは老い、どこかしら不自由になり、誰かの助けを必要とするだろう。だからこそ、真の医療に少しでも関心を持つ人が増え、地域全体そして社会全体が、互いに助け合い、支え合えるようになることを願っている。

私が、私のこれらの経験を通して学んだのは、助けることだけが全てではないという事だ。医療が本当に目指すべき未来は「治療」だけではなく、人が自分らしく生きる「手助け」まですることではないだろうか。私は一人ひとりの命のその先の幸せに寄り添えるように、日常生活での意識の向上、情報発信などからはじめ、一步一步前に向かって歩み続けたい。